

---

# 名探偵コナン～B型の彼氏

Bloody orange

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵コナン〜B型の彼氏

### 【Nコード】

N4363S

### 【作者名】

B l o o d y o r a n g e

### 【あらすじ】

B型のキッドをメインにしたお話です。

前に韓流映画で『B型の彼氏』と言ったのがありますが、マイナス面ばかりとらわれるのではなく、この小説では、B型の快斗のプラス面を全面に押し出しています。

どんな困難でも、ヘコタレナイ強い所。

前向きに何でも考える所。

夜は月夜に見守れて佇む浮き世の怪盗キッド。

昼は、東都大学の大学生の黒羽快斗。

方や、東の名探偵 工藤新一は、『平成のホームズ』『日本警察の救世主』とまで言われる東都大学の大学生。

2人は、服部が声を間違えて声をかけた事により、知り合った。

B型の快斗が、奮闘するお話です。

自由奔放で、前向きな快斗が、気になる2人の探偵にちょっとしたサプライズを盛り込みながら、キッドとして彼らと対峙していくお話です。

青子に自分がキッドだと言う事を告白しようとするが、タイミングを失う。

やはり、青子には言えずにそのまま自分の胸の内に秘める事にした。青子は、自らキッドの正体をつかむ為に、白馬に相談する。

『キッドがどうしてキッドになったのかを知りたい。』

キッドは、自分の姿を白馬に連れられた青子に見られてしまう。

一応ハッピーエンドの話です。

快青のお話です。

## 自信満々

4月1日が、全ての始まりだった。

キッドは、ビルの屋上に佇んでいた小学生を見つけた。

『よお〜何してんだ？』

『花火だよ。』

俺を窮地に追い込んだ張本人、工藤新一だった。

しかし、目の前に居るのは、新一本人だが、小学生の子供だった。

あの時の苦々しい気持ちは、忘れもしない。

何度も過ぎ去る桜の季節を迎える度に、思い出す……。

蒼い双眸を持った少年の顔を。

凜としていて、まるで夜桜のようだった。

怪盗キッドとして、盗みに行くのは容易いものだったが、あの工藤新一との相性は最悪なのか、それとも最高なのか分からない程、合っていた。

面白い。

それなら、名探偵が進むと言われている東都大学にはいつてやろうじゃないか。

あのプライドが高く、独占欲が強い、頭脳明晰で、冷静沈着なあの名探偵を俺に惚れさせてやる！

そう意気込んでいた。

## 自信满满(後書き)

お仕置きシリーズと言うか、2人の馴れ初めですね。

## 計画

警察さえも、子供の様に手玉に取る．．．この怪盗キッド様に、不可能と言つ文字はないのさ！

さあて、どうやって あの名探偵と会うか．．．。

それが、問題だな．．．。

そついや．．．西の探偵もこの大学に入って居たんだよね．．．。

ペロリと薄い唇を舐めると、俺は髪型を整えて．．．。

『これで、ヨシ！完璧だな。』

何処から見ても、工藤新一にしか見えない。

俺は、そのまま普通に食堂に行つて、食券を買つと熱々のうどんを貰つて来た。

『熱！ 汁も跳ねてしまふな．．．。』

ふうふうして食べていると、いきなり後から、ドン！と背中を叩いて来るヤツが来た！

『おい！何すんだよ！』

『わりーわりー。工藤。俺や。』

ん？この五月蠅いくらいの音量と関西弁は……振り向くとあの西の探偵……。

服部平次だった。

『おい。服部！このシャツどうしてくれんだよ！』

『う……。そやな。俺の家で着替えるか。』

やった！これで、服部の家にしかけが出来るぜ！

服部と偽新一は、服部の家に行った。

『これで、エエか？』

服部が持って来た服は、服部には珍しいくらいの白いシャツだった。

『ああ。サンキュー』

言葉短に礼を言うと、シャツを着替えた。

服部が、トイレに立った時に、すぐにその辺に発信器や盗聴器を取り付けた。

何も無かった様になっているとすぐに戻って来た服部は、俺の顔を見て『ほな、行こか？』そう言い出した。

## サプライズ

服部のアパートを出てから、服部は色々な事をよく俺に話してくれた。

だが、コイツの音量は、本当にデカイ。

真面目に、俺は、リモコンがあつたら、絶対MUTEにしているな。そう思いながら、歩くと遙か彼方に名探偵の姿を発見した。

（ヤバい！此処で見つかったら、俺が仕掛けた物が全て水の泡だ．．．）

俺は、偶然にかかって来た携帯に救われた。

青子からだった。

『服部！悪リーな。蘭と待ち合わせだったのをすっかり忘れていたぜ。』

服部にここで、警部からなんて使ったら、コイツも付いて来るのは、知ってる。

だが、蘭だったら、気を利かせて俺達の邪魔をするほど、野暮じゃないのは、知ってるからな．．．。

『おう。お前、また蘭ちゃんを待たせとんのか。早よ行けよ！蘭ちゃんに宜しゅうな。』

そう言うと、俺は、脱兎のごとく走って行った。

『あ、青子か？ゴメン。今から、そっちに行くから、じゃあな。』  
急いで電話を切ると、俺は名探偵の携帯に電話を入れた。

もちろん、もう一つの携帯からだ。

これには、小細工がしてあって、着信表示に俺の携帯番号が出ない様になっている。

幾つもの回線を通れば、こつこつ風になる。

『もしもし。工藤ですが。』

『新一！もしかして、約束忘れていたでしょ！今日は、あなたの誕生日だから一緒に祝いするって決めていたのに、すっぱかしたら．



．．分かつているわね。』  
名探偵は、立ち尽くすと真っ青な顔になっていた。  
あ、本当に忘れていたんだ、この名探偵は．．．。  
確か、三日前にも蘭ちゃんから電話があったと思ったが．。  
半分呆れながら、電話を切った俺は、『2人に感謝されたいね。何  
て言ったって、こーやって会わせてやってんだからさ。』そう言っ  
と、軽快なステップで青子が待つ喫茶店に走って行った。

以前、俺の愛鳥に毛利探偵事務所を探らせた事があって、その時に  
知ったのは、毎年毎年あの名探偵は、自分の誕生日を忘れている事  
を知った。

まあ、キッドからの誕生日プレゼントと言う事で。  
蘭ちゃんが書いていた名探偵へのBIRTHDAY CARDに俺  
からのカードも入れて置いたのさ。  
気がつくとどんな顔をしてくれるのかな。

喫茶店に入ると窓の外をずっと見ていた青子の顔の前に、すっと手  
を出すと次の瞬間、『POW!』軽快な音と共に花束が現れた。  
青子は、驚いた顔をしながら、嬉しそうに笑っていた。  
『遅れて。ごめんな青子。ダチに掴まってたからさ。』  
『フフ。そんな事だろうと思ってた』

やがて同じ喫茶店には、蘭ちゃんと名探偵が入って来た。  
『新一が、自分の誕生日を覚えてる何て、珍しい事もあるものね』  
『へ？オメーが、電話をして来たから、思い出したただけなんだけど  
な。』

『え？だって、新一が私に電話をかけて来たのよ。今日は俺の誕生  
日だから、オメーと会いたいわ。』

『は？』

そんな会話が聞こえて来た。

『ふうん。本当に新一なのかしら？キッドが化けてるんじゃないの？』

『バーロー。んなわけねーだろ。』

『そうね。はいこれ。カードよ。』

『サンキュー。蘭。』

名探偵が、カードが入った封筒を破るとカードが二枚入っていた。

『え？私……一枚しか入れてなかったけど……。』

『これ……。一枚は、蘭から……。もう一枚は、キッドからだ。』

「名探偵 HAPPY BIRTHDAY TO YOU

いつも、俺を俺との追いかけてっことを楽しんでくれている名探偵に、キッドからの囁かなプレゼントは、気に入ってもらえましたか？では、またの対決を楽しみにしていますよ。

K I D

」

蘭にもカードを見せると『今日のデートって、キッドからのプレゼントだったのね。』そう言つと笑っていた。

## 俺が俺である為に

感度は良好。

あの関西弁の探偵君の家に仕掛けておいた、盗聴器はまだ見つかっていないようだな。

本当に、服部は抜けているようなところがあるが、憎めない人の良さが出ている。

これ以上、服部を調べても、何も出て来ないこと分かった。

『時間の無駄だったか。』

今日は、トロピカルランドで、マジックショーをやる予定になっている。

早く行かないと・・・。

昨日は、名探偵へのBIRTHDAY CARDにトロピカルランドの招待券を入れて置いた。

しかも、俺のマジックショーのチラシも。

ここまで、お膳立てすれば十中八九 あの彼女と2人で来てくれるだろうな・・・と期待をしている。

RRRRR・・・RRRRR・・・

お、電話だ。

一体誰からなんだ？

俺は、言葉を失った。

何故か、あの名探偵は自分の彼女ではなく、服部をマジックショーに誘うつもりのようなのだ。

一体、何を考えているんだ？

折角、人がお膳立てしてやったと言うのに・・・。

よく電話の内容を聞いていると、蘭ちゃんはどうやら空手の練習試合があるから、服部君と言って来てということだったのだ。

オイオイ、男2人でマジックショーか？

まあいいや。

今日のマジックショーは、忘れられない刺激的なショーにしてやるよ。

ニヤと笑うと、俺は急いで、トロピカルランドに急いだ。

## 最高のショーの始まり(改)(改)

『Ladies and Gentleman, boys and girls　これから、マジックショーを行います!』

俺は、わざと白い衣装で、この舞台に立った。  
でも、誰も俺がキッドだなんて、疑う人は居ない。  
みんな俺を只のマジシャンだと思ってみしてくれてる。

初めは、白い鳩がステージに次々と飛んで来ると、POW　軽快  
な音と共に、俺の登場だ!

子供達もこれには、喜んでくれている。  
小手調べに、帽子のマジックをやっていると、子供達が目を光らせて見ている。

俺は、この瞬間が一番好きだ。

普通は、鳩かウサギが出て来るマジックだが、俺は花束や少し大きな熊のヌイグルミを出してみせた。

大勢の観客に、カードのマジックは見ずらいと思い、今回は遠くの人にでもよく見えるマジックを中心にやっている。

観客席の方に、名探偵が来ていた。

ん?

こっちの方を見ているが……。

あの目は、絶対俺をキッドだと疑っている眼だな。

俺は、『では、私のアシスタントをここにいらっしやる皆様の中から、選ばせて頂きます。』

子供達は、小さな手を一生懸命に上げていた。

シルクハットを目深に被ると、口角を上げてキッドの雰囲気をつげと出してやった。

どうする？引つかかるか？  
名探偵？

俺を見ながら、周りを見ている。

少しずつ手が上に上がって来た……。

俺は、『私が選ぶと不公平になりますので、私の鳩に選ばせましよう。』

そう言つと風船を取り出し、膨らませると割れた風船の中から、一羽の白い鳩が現れた。

鳩は、観客の上をすーっと飛ぶと、名探偵の頭の上に降りた。

子供達は、『すごい！良いな〜！お兄ちゃん〜』

キラキラした眼差しで名探偵を見ていた。

手招きをする、名探偵はゆっくり舞台上が上がって来た。

『ようこそ。こちらへ。お名前は？』

『工藤新一です。』

『あの名探偵の工藤新一さんですね。手強い相手を私の鳩も、選んでくれたものですね。』

会場からは笑い出て来た。

『では、名探偵。こちらの紙にあなたの好きな人の名前でも良いですよ。書いて下さい。書きましたか？では、こちらのBOXの中へ入れて下さい。』

大きなBOXの中に何も無い事をアシスタントの名探偵に、確かめさせて紙を入れさせた。

『one...two...three...!』

BOXを開けると中から、女の子が出て来た。

すると名探偵も、驚きながら目を丸くしていた。

『ら、蘭！！何でオメーがここに。』

そんなに驚いてくれるとは、思わなかったな。

『私だって知らないよ。早くしないと試合時間に間に合わないよ。』

『笑いと感嘆の拍手が出た。』

俺は、『では、お嬢さんのご都合が悪いそうなので、また元の場所に戻ってもらいましょう。』

『そう言う俺は、指をパチンとならした。』

するとそのboxから、蘭ちゃんの姿は消え、勢い良く箱から出て来たのは、沢山の鳩達だった。

それを見た観客からは、大きな拍手をもらった。

名探偵は、俺の顔をじつと見て『オメー。何、考えてんだよ。』

あからさまに、俺を警戒している名探偵の目。

俺は、クスツと笑う。

『いえね。昨日の私からのサプライズは、気に入って頂けましたか？』

名探偵。』

そう言う俺は、鳩を次々と何も無い手の中から、鳩達を一羽一羽出して、自分の体に鳩達をとまらせると、『早く、彼女の所に行くんだな。名探偵。』彼に言った。

俺の体は、もう既に鳩だらけ。

指をパチンと鳴らすと、俺の姿はかき消され、鳩達は空へ飛んで行った。

スピーカーからは、『本日のマジックショーは、これでお仕舞でございます。ありがとうございます。』

と言うアナウンスが流れた。服部は、一人観客席で名探偵が、ステージに立ち尽くしているのをじつと見ていた。

『工藤！一体、何があつたんや？』

『キッドだったんだよ！さっきのマジシャンは、キッドだったんだ』

よ！』

『せやかて、幾らキッドでも蘭ちゃんまでは出されへんやろ？』  
流石に名探偵だ。

『ああ、あれはな。箱から立体のホログラムで蘭の姿を映していたんだよ。』

ほうくやはり、見事なまでに見破られていたのね。流石は、名探偵。お見事だね。

まあ、名探偵の慌て様を見れたから、good job！

俺は、大道具の係の服を着て、2人のまわりを行ったり来たりして様子を伺っていた。

『キッドのヤツ。お節介も良いとこだぜ。』

そう言っている2人の所に、俺の愛鳥が服部の肩に止まった。足に、赤いリボンが巻かれていた。

『これって……。。和葉のリボンやないか……。。』

『ったく、キッドめ、余計な心配ばかりしてくれなせ。』

服部は、『工藤！俺等は、そんだけキッドからも、心配されてんや。早よ蘭ちゃんの試合の応援に行かなアカン。』そう言うと2人で走って試合会場へ行った。

『全く世話が焼けるぜ。』

親父のステージほどじゃないが、名探偵達に、少しは楽しんでもらえたみたいだよ。



最高のシヨ一の始まり(改)(改)(後書き)

駄文で、すみません。

## 待ち合わせ

『おう！青子！行くぞ。』

青子の手を引いて、俺はトロピカルランドに行った。

久々の自由な一日を青子と一緒に過ごしたい。

そう思ったんだ。

青子の前で戯けたり、学校で毎日マジックをしているのも。

本当は、青子。

お前のその驚いた顔を見たいからだよ。

『ば、バ快斗！』

『アホ子は、アホ子なんだよな。』

俺達の中を壊す者は、誰もいないだろう。

俺は、そう思っていた。

ただ、青子の表情が変わる時がある。

キッドの予告状の日だ。

父親思いの青子は、『キッドは、犯罪者なのよ！』

その言葉で、俺はいつも思い知らされる。

そう、俺は犯罪者なんだと。

『ねえ。快斗って血液型何型？』

『へ？俺？B型だけど。』

『やっぱり・・・この本の通りだわ。お調子者で、マイペースで、自己中って書いてある。』

『オイオイ！この世の中には、40億人の人間が住んでいるんだぜ！それをたった4種類のタイプに分けるって言うのは、無茶苦茶だぜ！』

そう俺が言うと、青子も『それもそうね』と言って来た。

『だろ？それに、ゴリラなんて、血液型は全てB型しか無いんだぜ、

なのに気性が激しいのや、大人しいのがいるから、それはどう説明するんだよ。』

『そ、それは……。』

『B型だろうが、A型だろうが、血液型っていうのは、相性とかじやなくて心の問題だろ?』

そこまで言うと青子も、ウンウンと頷いて来た。

『俺は、B型だけど、だから青子は俺の事好きじゃないのか?』

『そ、そんなことナイよ』

『だったら、こんな血液型の本は読むな。それよりも、好きな人の事をもっと見て欲しいな。俺としては。』

そう言うと、いきなりここで快斗がマジックショーをやり出した。

『俺の特別な客は、いつも青子なんだぜ。』

そう言うと白い薔薇を出して、青子に渡した。

青子は『綺麗ね。ねえ。花言葉は何て言うの?』

快斗は、頬をポリポリかきながら『そ。それはなく私は、あなたに相応しい。って言う意味だ。』

青子の顔が真っ赤になった。

いつまでも、こうして居られるといいな。

## 俺が、守りたいもの（改）

俺達は、観覧車に乗った。

『わ〜ねえ。快斗。杯戸町がよく見えるよ〜。』

『ねえ快斗。キッドって、いつもこんな景色を見ているのかな．．．』

『

ん？何でそんな事を聞くんだよ。』

俺は、2人つきりになった時に青子に聞いてみた。

『青子。やっぱり、キッドは嫌いか？』

『嫌いよ。それに犯罪者よ。』

『青子。もし、俺がキッドだったら、どうする？』

いつになく、俺は真剣な顔で青子に聞いてみた。

『キライには、なれないよ。でも．．．。』

『でも？どうしたのさ。』

『もし、快斗がキッドだったら、どうしてキッドになったのかを知

りたい。しょうもない理由だったら、自首して欲しいもん。だけど．

．．．。』

『だけど？』

『キッドにならないと、探せない物だったら、目を瞑るよ』

青子の言葉に驚いた。

快斗が、青子の肩を掴むと、『青子．．．俺．．．』

カチャリと観覧車の扉が開いて、『はい降りて下さい。』

俺達は、クスリと笑うと『行くぞ？ 青子！』そう言うと、俺は青

子の手を引っ張って、時計を見ながら広場に走っていった。

『どうしたの？』

『10、9、8、7、6、5、4、3、2、1』

俺達の周りには、二重噴水の壁ができた。

青子は、目を輝かせながら「スツゴイ？ キレイ！！ あ！ 快斗！ ? 見て見て！！！ 虹よ？」

俺は、この青子の笑顔を見るだけで、満足だ。

『POW』何も無かった手の中から、赤い薔薇を出した。

青子は、ぱあっと明るい笑顔を俺だけに見せてくれた。

この笑顔を曇らせる事だけは、したくない。

青子の笑顔は、俺にとって1番大事な物だ。

この笑顔を守る為なら、俺はピエロにだってなつてやるさ。

だから…俺は言わないよ

俺の苦しみまで、青子に背負わせる事は、出来ないからな。

このままで、いいのさ。

広場で、大道芸人ばりに、即興のマジックやジャグリングをして、人を集めていた俺を青子は優しく見つめていてくれた。

女の子が、躓いて手に持っていた風船を離してしまった。

大泣きの女の子に、俺は近づくと手品で風船を出して、その子に渡した。

笑顔になったその女の子は、走ってお母さんの元へ行った。

『やっぱり、快斗は、凄いよ。優しいし。』

青子が、笑顔で俺に言ってくれる。嬉しい言葉。

『男前だし。マジック上手だし。足長いし。嬉しいね。』

俺は、調子に乗って青子の声帯模写しちゃったよ。

少し、青子の顔色が変わったけど、バレては居ないよな……  
きつと。

俺が、守りたいもの(改)(後書き)

ちょっとお調子者で、優しい快斗くんを書いてみました。

すれ違う思い　～青子side～

噴水の壁ができた広場から、空にかかる虹を見た。

良かった～

快斗が笑っている。

さっきの観覧車の中で、快斗は一体何を言おうとしたの？

あんな真剣で、そして辛そうな快斗を見たのは、初めてだよ。  
だから、決めた。

以前から、白馬君に誘われて居たある事を思い出した。

『中森さん。あなたならキッドが、どうしてキッドになったのかを聞ける、かもしれませぬよ。』

青子は、決心した。

キッドに会いに行こうと！

快斗と2人で家に帰る途中で、『ねえ、快斗。観覧車の中で、なんて言おうとしたの？』聞かないと気が済まなかった。

青子は、真直ぐ快斗を見るけど、快斗は『うん。青子の笑顔見たら、忘れちまったよ。でも、今日は本当に楽しかったな！。青子？』

快斗の屈託の無い笑顔を見ると、『うん！青子も楽しかったよ？また一緒に行こうね？快斗？』

また、いつもの様に誤摩化されたみたい。

一体何を言おうとしたんだろう？

私達は、それぞれの家に帰った。

その夜、青子は白馬の家に電話をかけると、『白馬君。お願いがあるの。今度のキッドの予告日には、私も連れて行って欲しい。』そう言った。

白馬君からは、予想もしない事を聞かれた。

『どんな現実でも、受け止める覚悟はありますか？』

どんな現実？

一体何なんだろう？

『も、もちろんよ。』声がうわずってしまった青子は、自分が今、物凄く緊張している事に気がついた。

『中森さん。どうして今頃になって、キッドに会いたいと思う様になったのですか？』

白馬君の言葉は、私の心の扉を叩いている。キッドを知りたいと思う私の心を。

『白馬君。青子ね、知りたいのよ。どうしてキッドが、キッドになったのかを。だから、キッドと話がしたいの。』

青子は、時計台の前で快斗からもらった花を握りしめていた。

まさか、快斗は、白馬と青子がこんな事を話していようとは、知りもしなかった。

来週末に迫って来たキッドの予告日に向けて、色々と下準備をしていた。

来週は、下見として青子と一緒に美術館に、行く約束もしてある。

青子が快斗に『ねえ。快斗そう言えば、今日見に行くビッグジュエルも、キッドが狙っているのよね。』

『そうだな。盗まれちゃう前に、早く見に行こうぜ。』



そう言うと2人は、森の美術館へ急いだ。

本日まで一般公開の日で、明日からは厳重な警備が引かれると言う。

「今回も楽勝だぜ！」そう思う快斗の横顔を見ながら、青子は『早く！早く！快斗行くよ！』そう言って、快斗の手を引っ張って美術館の中に入った。

『ねえ快斗。このビッグジュエルが、キッドに狙われているのね。』

『そうだな。』

黒海の雫と言われるブラックオパールだった。

『ほえ〜デカイな．．．．。』

『ねえ、快斗。これって本当に本物なの？』

『そうみたいだな．．．。ま、キッドが盗んで返せばすぐに分かるんじゃないのか？』

『何で？』

『だってさ〜いつもそうだからな。』

『今回は、お父さんも頑張っているんだから！キッドなんかには負けないわよ！』

『ま、せいぜい頑張るんだな〜』

青子。悪いな俺は、負ける分けにはいかないんだよ。

例え、光の魔人でもな。

『ねえ、快斗。私がキッドと．．．ううん。何でもないの。忘れて快斗。』

『途中で終わらせるなよ。最後まで言えば良いじゃんか。青子!』

『ううん。自分で何言ってるのかわかんなくなっちゃって．．．。』

白馬君に言われた通りの事を言うと、快斗は顔を曇らせていたけど、これも白馬君の作戦だと言っていた。

ゴメンね快斗。

青子、本当にキッドと話がしたいの。

だから、しめんね。

すれ違ひ思い　＼青子side＼（後書き）

青子ちゃんって、何型なんでしょうかね？

## 想定外の出来事（改）

中森警部の怒号が、館内に響き渡る。

『キッドを捕まえて、今度こそヤツを冷たい監獄に入れてやるぞ！』  
大勢の警官達は、一斉に『オオオ〜！！』と大声を上げた。

警官達の中に、キッドが居る事も知らずに、士気を高める中森警部。予告時間となり、俺は排気口から、ビッグジュエルが展示されている部屋へ忍び込んだ。

今回は、白馬もあの生意気な小学生の姿だった、工藤新一も此処にはいない。

張り合いがないと言うのは、この事なんだろうな……。そうポツリと言いながら、俺はダミーをしつかり飛ばすと、警部達を翻弄させた。

明後日の方向へ飛んで行くダミーを警官達は、必死に追いかけていた。

オイオイ、毎回騙されてどうすんだよ。

学習能力つけてくれよ。

毎回毎回ダミーに騙されてきているから、こっちも楽々に仕事が出来るってもんだけどな。

その間に、俺は反対方向へハングライダーで飛んで行くと、中間地点である廃ビルの屋上に降り立った。

月に今日のお宝のビッグジュエルを翳すと、『また、外れか……。一体何時になったら、見つかるんだよ。』そう呟くと人の気配がした。

『おやおや、名探偵ですか？私の儀式を中断させるとは、何とも無粋な……。まあ、これは名探偵にお返ししますよ。』  
俺は、名探偵に花を投げた。

受け取ったのは、名探偵ではなくて、青子だった。

俺のポーカーフェイスが、少し崩れかけた。

『あ、青子……。』

いつものポーカーフェイスを取り戻した俺は、『お嬢さん。どうされたんですか?』ようやく口に出来る様になった言葉を紡いだ。

『どうして……どうして……。快斗……。なんでキッドになったの?』

青子の泣きそうな声に、俺は、怪盗キッドの仮面を被った。

『お嬢さん。誰かと勘違いされていませんか? 私は、気障な怪盗ですよ。あなたが言ってる人とは別人ですよ。』

そう言う俺に、青子は、抱きついて離れなかった。

『青子が間違える分けないもん。こんな小さい頃から見ていたんだもん! 快斗だもん! だって、一緒にお風呂に入った仲だもん!』

(おいおい、こんな所で言う、台詞かよ! 冗談じゃないぜ。いつまで、俺のポーカーフェイスが、持つか分からないし……)泣きじゃくる青子に、ポンと手品で花を出した。

『私は、怪盗キッドですよ。中森青子さん。』そう言い残すと、俺はハングライダーで飛び去った。

ひょえ〜危なかった。

でも何で、あんな所に、青子が名探偵と一緒に居るんだよ!

白馬なら分からないではないが……。

## 消えた青子（改）

あの夜、青子が俺を一瞬見ただけで、キッドが俺だと分かった。俺は、どんな顔をして、青子に会えば良いんだ？朝からどんよりと曇った雲が、空一面を覆っていた。

次の日から、青子は学校を欠席した。

青子の席は、静かだ……。

教室つて、こんなに静かだったか？

なんだか、心にぼっかりと大きな穴が空いた気がする。まるで、親父を亡くした時と、同じ喪失感。

白馬は、俺にぼそつと言つて来た。

『青子さんから、「キッドと話がしたい」って言つて来たんですよ。ですから、工藤君を紹介しました。工藤君が、青子さんの側にいるのなら、キッドも、そして黒羽君もいらなぬ心配などする必要は、無いですからね。』

だから、あの時、名探偵が青子の側に居たのか……。

紅子は、『正体がバレたのかしらね。だって、中森さんが学校を休んで、今日で一週間よ。』俺に耳打ちをしてくる。

俺は、『良いんじゃないのか。青子が居なくなって、教室が静かになってさ。』興味なさそうに、新聞を開いて読んでいた。

『あの〜黒羽君。新聞、逆さまですよ。』

白馬からの指摘で、『逆さまからでも読めるんだよ！』俺は、強がっていた。

『黒羽快斗君。至急、校長室までお越し下さい。』

まさか、バレたのか？

校長室で、手品の下準備をしたり、紙吹雪を体育館にまき散らしたりしたし．．．。この間は、クレーンも学校に持って来ての、マジックをしたんだよな．．．でも、やる事はやっても、きちんと掃除はしたぞ！それとも、あの事かも．．．。

頭の中で、色々と自分がやらかした所行が、ドンドン泉の水の様に湧いて出て来る。

ヤバイ！一体どれだ？

コンコン

『失礼します〜』

校長室に入ったら、中森警部が居た。

「青子が、バラしたのか？」一瞬思った。

『快斗君。青子が何処かに行ってしまったんだ！青子が行きそうな所を知らないか？』青くなった中森警部の表情に、これは嘘ではないと分かった。

中森警部の話によると、夜勤明けで帰って来た家のテーブルの上には、置き手紙があった。

『探さないで下さい。一人で考えたいから。青子』

俺の所為だ．．．。

あの夜の事が、やっぱり青子を追い詰めたんだ……。

俺は、頭をフル回転させて色々と考えてみたが、これと言うような場所は無かった。

『おじさん、すみません。俺も、何処に青子が行ったのか、分からないんですよ。』

『校長先生！俺、青子を探して来ます！』

必死な顔で俺が言うと、校長の意見も聞かずに『ありがとうございませ〜じゃあ、探して来ます！』そう言うと俺は、学校を抜け出すと、最初は俺の家に行った。

灯台下暗しって感じで、もしかして、ここかも……。

居なかった……。

先々週に、2人で行ったトロピカルランドにも、行って来た。

観覧車の係員にも聞いて回ったが、誰も、青子を見た人は居なかった。

ここも、外れだったか。

まさか……あの夜廃ビルの上とか……？

俺が必死で走っていると横に車が止まった。

『黒羽君。僕達も探しますよ。』



車に乗っていたのは、白馬と紅子だった。

『サンキュー。でも、俺一人で探すよ。わりーな。白馬、紅子。青子は、俺に見つけて欲しいんだよ。だから……すまない。』

俺は、空を仰ぐと息を深く吸った。

ここ東都は、空気が淀んでいる。

少女趣味の青子が行くとしたら、多分 空気の綺麗な場所で、沢山の星達が見える場所だ。

何処だ？

中森警部が言うには、青子はそんなにお金を持って行ってないと言っていた。

なら、関東でも、南の方が……。

その時に、思い出した。

確か、ずっと前。

まだ親父が生きていた頃、一度だけ青子と俺と親父の三人で海に行った事があったな……。

夜までいて、星が綺麗だった……。

『神様の魔法にかかったみたい。辛い事も忘れられるもん。』そう

言っていたな。  
だけど．．．。  
何処の海だ？

消えた青子（改）（後書き）

書き換えました。

## 思い出の海岸

『神様の魔法にかかったみたい。辛い事も忘れられるもん。』  
今の青子にとって、最も辛い事は、俺がキッドだと言つ事だ……。

東海道線に飛び乗ると、辻堂で降りた。

そこから、江ノ島電鉄のバスに乗って、湘南海岸まで行くとバスを降りる。

目の前に広がる海岸線を見渡す。

ゼイゼイ、息を切らせると砂浜に降りて、大声で叫んだ。

『青子〜青子〜！何処だ〜！ 青子〜！』

海岸の右の方に、烏帽子岩が見え、左の方には江ノ島が見えている。  
この辺だ。この辺りに青子は居るはずだ。

青子……。

何処にいるんだよ。

砂浜に足を取られながら、俺は走った。

『あ、青子……。』

何処だ！何処だ青子！

知らない間に俺は、茅ヶ崎の所まで来ていた。

サンの歌にある烏帽子岩がすぐ近くに見える。

もう、走る気力さえもない……。

俺は、埠頭に行くとは大声で叫んだ。

『青子のバカヤロー！何処に行ったんだよ！青子のアホー！』

俺の後で人が叫んでいた。

『おい！あれっ！何だ？船か？ゴムボートか？』

『お、女の子だ！中学生くらいの女の子が、流されているぞ！』

俺は、ハツとして、そのおじさんに『すみません双眼鏡を貸して下さい。』

船の中で横たわっていたのは、青子だった。

『青子！起きろ！』

俺の叫び声も、波の音で消されて聞こえない。

## 思い出の海岸（後書き）

江ノ島にしようかと思ったのですが、普段でも人がいっぱい居るので、辻堂〜茅ヶ崎方面の湘南海岸にしました。

## キッド確保

俺は、唇を噛み締めながら「あ、青子．．．．俺が助けてやらないと．．．。」

気がついたら、俺は海の中に飛び込んでいた。

「あんちゃん！ここいらは、海流が激しい所もあるんじゃ。気をつけろ。ホレ。」

見知らぬおじさんが、俺にロングボードを投げて寄越してくれた。

「サンキュー、おじさん。」

俺は、ロングボードに乗って、腹這いになると、パドリングをして（手で波を押す）前に進んだ。

「あんちゃん！頑張れ！」

おじさん達の声に押されながらも、前に突き進んだ。

たまに、トビウオが俺の手に当たると「ひえ！魚！」と叫んでいたが、今は魚に怯えるよりも、青子を失う方がもっと嫌だ。

小舟に辿り着くと、眠っていた青子を起こした。

「おい、青子。オメー何処で眠ってたよ。」

「え？快斗？何処つて、疲れたからこの小舟の中で寝ていたのよ。」

青子が、起き上がると船が、大きく揺らいた。

「おい、バカ！いきなり起きるなよ！転覆しちまうだろ！」

青子は、ようやく自分が寝ていた小舟が、流されて沖まで行った事に気がついた。

「か、快斗！怖いよ！！！」

俺にしがみつくと、俺は発煙筒に火をつけて埠頭に居る人達に、青子の無事をモールス信号で伝えた。

「青子．．．。ゴメンな。俺．．．。どうしても、親父の仇を取りたかったんだよ。だから、キッドを襲名したんだ。哀しませてゴメン．．．。」

俺の意外な言葉に、青子は「．．．．快斗が、キッドだったのは、

ショックだったよ。だけど、快斗なりに理由があると思ってたよ。話してくれてありがとう快斗。青子は、快斗の見方だよ。絶対にお父さんにも言わないよ。快斗の目的が終わったら、その時は罪を償ってくれるよね。』

『ああ。中森警部に大目玉くらいそうだけだな。』  
悪戯っぽくウインクすると、そつと青子を抱き寄せた。

『!!!青子！波が来る！こっちのサーフボードに來い！』  
俺は、青子をサーフボードに乗せると、必死に両手でパドリングをした。

『青子しっかり掴まってる！』

『うん！快斗！』

気がつくと俺達は、大きなウェーブの上に居た。

『怖かったら、目を瞑れ。青子！俺が居るから、俺が側にいるからな。』

青子は、俺の顔を見てニッコリ笑うと『大丈夫だよ。青子は、キッドの彼女だもん。怖くないよ。』そう言うのと笑っていた。

俺は、この青子の笑顔に弱いんだよね……。

中森警部の手錠よりも、さらに手強い青子の笑顔に、俺は確保されただんだな……。



## キッド確保（後書き）

前まで書いていた文章から、変更しました。

辻堂からだど江ノ島も、茅ヶ崎の烏帽子岩も見えるので、書きやす  
いと思い取入れました。

ちなみに、私はサーフィン出来ません。

海にも入れません。

水恐怖症なんです。

もちろん、タイタニックなんて・・・怖くて観れません。

もう少しで、この話も終わります。

## 白い鳥（改）

俺は、真上にいる寺井ちゃんのをりを見つけると、上から垂れて来たロープにつかまった。

『青子！これが！キッドの大脱出だ。』そう言つと、素早くキッドになつて青子を抱き寄せると、上空に行つた。

気流が良い所まで、へりでもらつた後、『青子、お前が見たかつたものを見せてやるよ。』そう言つと俺は、ロープに着けてあつたラッチを外すと、青子と一緒に薄暗い空に身を投げた。

『きやあああ！』

青子が叫んでいたが、俺がハングライダーを広げると、固く閉じていた眼をそつとあけた。

太陽が、沈んで夜の世界がやつて来る。

東都の空では、見れない輝く星々の下を俺達は、一緒に飛んだ。

『神様の魔法にかかつたみたい。辛い事も忘れられるもん。』

あの時の言葉を青子が口にすると、俺も微笑んだ。

『俺も、キッドもそうさ。だから、キッドは月を見るんだよ。その宝石の中にある真実の物を探す為にな。それまで、俺はキッドを続ける。』

『じゃあ、ワタシ警視庁に入っちゃおうかな？検挙率n01になりそうね。』

『バーロー。キッドは、中森警部にさえも、捕まえられないんだから、青子には無理だよ！』

『快斗！じゃあ、私は何になれば良いのよ！』

『俺の側に居ろよ。』

『．．．．え？』

きよとんとした顔で、青子は俺の顔を見ていた。

『俺の隣にずっと居ろよ。俺の側にな。』

この日の夜遅く、俺達は家に帰った。

中森警部に、『青子を連れて来ました。』と言うと、警部は大泣きで青子に抱きついていてた。

青子は、『キッドに助けられたの。』笑顔で言った。

それから、何度も俺は予告状を出して、目的の宝石を見つけようとした。

その度に、中森警部は、俺を捕まえ損なった。

青子は、もう以前のように五月蠅く言わなくなったが、『私しかキッドを逮捕出来ないものね。』そう笑顔で言えるほど、強くなった青子に俺は、困った表情を見せる。

学校では、白馬と紅子が、俺に『何か、中森さん吹っ切れたみたいね。仲直りしたのね。』そう言って笑っていた。

今夜も俺の戦いは続く。

あのパンドラを探して、粉々に砕くその日が来るまで．．．。

## B型の彼氏のプロポーズ

あの夜から、2年経った。

星振る夜に、俺は、青子と2人船の上にいる。

俺は、青子の前に跪いて『青子。俺と一緒に、パンドラを探してくれ。』

青子の指に光るプラチナリングをはめた。

『快斗。いつになったら、見つかるかも分からないけど、ずっと青子は、快斗の見方よ。だから、ずっと側に居させてね。』

折角、気障に決めてキッドらしく、2人にしか分からない愛の言葉で、プロポーズをしたのに……。

ガツクリ来た快斗。

『バーロー！だから、プロポーズしてんじゃねーかよ。』

照れながら言う快斗に青子は、笑いながら俺に抱きついた。

『あ、プロポーズだったんだ。ゴメン。だって、結婚しようとか言わないじゃないの。だから、分かんなかったよ。』

『け！そんなありきたりな言葉で、このキッド様がプロポーズすると思っっているのかよ。』

『か、快斗！海が赤い！』

『は？んな訳……。』

紅い月に照らされた海に、真っ赤に光る月。

『ま、まさかな……。』

『月が、パンドラなんてそんなことないわよね。』

『まったく、ムードも減ったくれもないな……。』

仕切り直しのプロポーズをした。

『青子、俺と結婚して下さい。』

『ハイ。快斗とキッドの2人分愛するよ。』

ニツコリ微笑む青子に、快斗は優しくキスをした。  
夜空には、満天の星空が俺達を祝福してくれている。  
のちに産まれる子供達に、この日の事を笑って話す時が来るだろう。

## キッドの葛藤

俺の予告日には、いつも我が家に緊張が走る。

青子は、そんな俺の帰りをハラハラしながら待っていてくれる。

『こんなに、死ぬほど心配しなきゃいけないんだったら、キッドを捕まえなきゃ良かったかも……。』

毎回、俺が仕事を終えて帰って来ると、いつも泣き出しそうな顔で、俺に抱きついて来る。

俺が青子を不安にさせているのは、分かる。

だけど、これは俺の戦いだから。そんな俺の戦いの衣装を撫でながら、涙を零す青子に『今回も外れだったよ……。』そう呟いた。

『この命が続く限り、俺は戦い続けなきゃなんねーんだよ。』

『分かっているわ。快斗。だけど、子供の事も考えてあげてね。』

俺は、真夜を抱っこすると『自分の息子には、この仕事は継がせたくはないんだ。俺の代で終わらせないと。その為には、早く見つけないと……。』そう微笑むと真夜に頬ずりをした。

青子は、俺の背中に抱きつくとき『止めても無駄だって分かっているけど……。自分の子供に、あなたと同じ思いをさせないで……。』

『ああ。』

怪盗キッドは、今夜も東都の空をハングライダーで飛んでいる。

目当ての宝石が見つかるその日まで。

## 戦いへの道へ

『やあ。名探偵。またお会い出来るとは、思いませんでしたよ。今日は、あなたにとつてとても大事な夜ですからね。これは、お返ししましょう。私の目当ての宝石ではありませんでしたから。』

キッドは、月に宝石をかざしていた。

一つまた溜息をついて、名探偵に宝石を投げるとカードを残して消えて行った。

『Happy Birthday to you ichhi』

そのカードを拾うと、新一は『まったく、気障なヤローだぜ。優一の誕生日カードを送る為だけに、ここまでするなんてな。』そう言ううと6才になった優一に、キッドからのカードを渡した。

『わ〜！世界中探したって、俺だけだよ！キッドからのbirthday cardを貰える子供って』

喜んでいる優一に笑顔で俺は『ああ。そうだな。』そう答えた。電話で快斗に『今夜は、寒いから控えろって言ったはずだろ？』と文句を言う。

快斗は悪びれもなく『しゃーねーだろ。優一に頼まれたんだよ。キッドからの誕生日カードが、貰えたら探偵冥利に尽きるって。』

『へ〜、優一がねー。』



新一は、嬉しそうにカードを見つめる優一を見ていた。

『サンキューな。快斗。後で我が家に集まるぞ。』

『魚料理だけは、止めてくれよな。』

『分かっているよ。』

目配せをしながら、蘭に快斗達がもうすぐ来る事を伝えた。

『青子さんと真夜も連れて来いよ。優一が楽しみにしているからさ。』

『ああ。』

快斗達が、工藤邸に到着すると、お腹の大きい青子を快斗が支える。

彼らを迎えるのは、新一とお腹の大きい蘭だった。

真夜と優一は、先に家に上がり込んで、書斎で本を読んでいる。

『真夜！新一の言う事をちゃんと聞くんだぞ！何て言ったって・・・』

『名探偵なんだもんね。工藤新一君は、何て言ったって、キッドを親友にしちゃうほどの。』

俺の言葉を紡いだのは、青子だった。

『快斗。もうすぐなんだろ？2人目が産まれるのは。』

『まあな。不安だよ。青子は、いつまで経っても子供だし．．．。』

『その子供っぽい青子さんに惚れたのは、お前だろ？お互い、2人目が出るのは、確かに複雑だよな．．．。』

『男じゃなくて、娘なら尚更だ。』

そう、蘭のお腹の子供も、女の子だと分かっている。

『なあ。快斗、いつそ真夜と産まれて来る俺の娘と結婚させるって言うのは、どうか？』

『そりゃいいな。じゃあ、俺も俺の娘と優一を結婚させるか。』

『じゃあ、婚約成立って事で！』

『乾杯！』

2人の父親は、笑いながらこの日に誓った事が、いつの日か実行される日が来る事を祈った。

青子と蘭は、半ば呆れながらも、お互いのお腹の子に『お父さん達が、勝手にあなたのお婿さんを決めちゃったわよ。』そう言つと笑っていた。

俺達は、探偵も怪盗も超えた親友となった。

まるで、俺達の父親のように。

戦う時は、お互いの場で、それ以外は無二の親友で。

お互いの敵を倒す為だけに、俺達は進んで行く。

新一は、黒の組織を。

快斗は、パンドラと組織の奴らを。

月だけが俺達の行く道を示している。

果てしなく続く戦いへの道を。

完

## 戦いへの道へ（後書き）

此処まで読んで頂き、ありがとうございます。

初めて、本当に変なエロスの方向に行かなかった作品です。

ああく良かった。

純な物かけて・・・。

いつか、この続きの話を書ければ良いなと思います。

ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4363s/>

---

名探偵コナン～B型の彼氏

2011年10月8日18時25分発行